沼島の旅 2025

2025 年 5 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

４月の初旬、私は友人と淡路島のすぐ南にある沼島（ぬしま）に電車・バスを利用して行ってきた。島内を歩いてほぼ一周し、美味い魚料理を食べ、歴史ある島を堪能した。帰途で淡路島のリゾート施設にも泊まり BBQ を楽しんだ。

その１か月後、今度は和歌山からヨットで沼島に渡り、鱧尽くしの料理を食べてきた。

第一章　沼島

■旅の始まり

兵庫県の淡路島のすぐ南に周囲約 10km、人口 357 人（2025 年 3 月現在）の沼島（ぬしま）がある。

私はその存在さえも知らなかったが、今年 2 月に行った家島諸島の宿の主人から沼島のことを聞き、今回の旅を計画した。

沼島の宿に電話を掛けたら 1 人のお客は断っているとのことで、小さな島では何かあっても宿として対応できず仕方ないのだろう。そこで家島にも一緒に行った和歌山在住のヨットマン横さんを誘った。

【沼島の位置】

私と横さんは大阪で落ち合い、高速バスで明石海峡大橋を渡り淡路島の洲本市まで行き、コミュニティバスに乗り換えて沼島行の渡船が出る港に向かう。

小さなコミュニティバスには私たちしか乗っていない。そして私たちが観光目的でこれから沼島に行くことを年配の男性運転者に話すと、彼は待っていましたとばかりに沼島について話し始める。それは話し相手に飢えているといった感じで、恐らく乗客はいつも同じ人か、あるいは誰も乗らないことが多いのだろう。今回も私たちが乗らなければ空気を運んでいた。

最近、地方を訪れると同様な体験することが多く、地方の人口減少は深刻だ。政府はかなり前から対応をしてきたはずだが、付け焼刃の補助金ばかりで有効な対策を打てていない。

私はまず日本の将来ビジョンを示す必要があると思っている。それも具体的で分かり易い姿を示すことが重要だ。かつての日本は富国強兵と殖産興業をかかげ、それが加工貿易になり、その結果として経済大国になった。しかしその後は何も示していない。

私の考える日本の将来像は・・・、おっと、この話はこの辺で止めておこう。

さて、運転手は得意げに名所などを話してくれたが、中でも私が興味を持ったのはこの地方の伝承で、「神が最初に沼島を創り、そして淡路島、最後に日本列島を創った」というものだ。

私はこれから行く沼島が日本の始まりかと思うと、何故かワクワクしてきた。

■日本の始まり

いよいよ日本の始まりの沼島に上陸する。すると案の定、島内には神社が多い。船を降りてすぐの場所に「弁財天神社」があり、まずは参拝して今回の旅の安全を祈願する。

港を臨む高台に「八幡神社」がある。鳥居をくぐると階段が 40 段くらいあってそれを登り終えて立派な神門をくぐり、また階段を同じくらい登ると境内にでる。平地が少なく山が多い島ならではの造りをしているが、境内は意外に広くて趣のある立派な本殿がある。

この神社には海上安全と豊漁の神が祀られており、横さんの知り合いのヨットマンがここで結婚式をあげたということなので海の男の聖地でもあるのだろう。

【八幡神社の入口の鳥居と階段と神門】

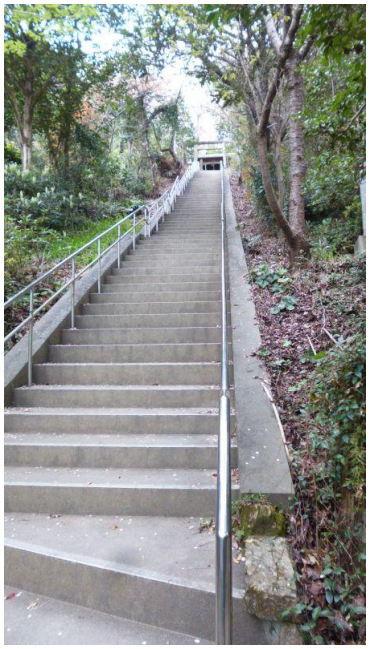
日本の始まりに関係する「オノコロ神社」は港の外れの山の中腹にあり、先ほどの八幡神社よりもさらにたくさんの階段を登らないといけない。

登り始めて最初は快調だったが、いくら登ってもなかなか本殿に着かない。やはり日本の始まりには簡単にたどり着けないらしい。やっとのことで登り終えると、私も横さんも息が上がっている。ゼーゼー言いながら狭い境内を見渡すと大きな碑がある。

碑には「神話によるとイザナギとイザナミの 2 神が天の浮橋に立ち、天沼矛（あめのぬぼこ）で混沌とした世界をかき回し、引き上げた矛の先から落ちた雫が固まって島となった。これがオノコロ島だ」と書かれている。もちろんオノコロ島は沼島を指している。

境内には 2 神が矛を引き上げた時の様子を示した石像がある。矛の先が剣ではなくトゲが付いた球体になっており、私のイメージとはだいぶ異なる。

「自凝神社」という表示がある。オノコロを漢字で書くと自凝で、雫が凝（こ）り固まり、これ自（よ）り日本が始まったことから自凝と書くのだろう。これは意味を知らないとまず読めないだろう。いや知っていても読める人は少ない。



【オノコロ神社への階段】

【オノコロ神社の境内にある 2 神の石像】

島の東海岸には「上立神岩（かみたてがみいわ）」という奇岩が海の上に立っている。この岩も日本の始まりに関係しており、いくつかの言い伝えがあるとコミュニティバスの運転手が言っていた。

それは、この上立神岩に 2 神が降り立ったとする説、オノコロ島はそもそもこの岩であるとする説、さらにこの岩が世界をかき回すのに使った矛の先端だとする説になる。

2 神は浮橋に立っていて矛の先から落ちた雫が沼島になったのならば、矛の先というのがもっともらしい説になるが、私はどれも当てはまらない気がする。

とういうのは上立神岩から少し離れた海岸に下立神岩という岩があると、横さんから聞いたからだ。彼は何度もヨットレースで沼島に来ており、海岸については詳しい。彼の話では昔は下立神岩の方が大きかったが、崩れて小さくなったと言っている。

【上立神岩】

もしも私が神話を書くならば、ひと仕事を終えたイザナギとイザナミの体が固まって、イザナギが下立神岩にイザナミが上立神岩になったとしたい。

ちなみに神話では、イザナミが死んでイザナギが黄泉の国（死後の世界）まで追いかけて行くが、イザナギだけ帰ってきた。その後イザナギの体から三貴子（アマテラス、ツキヨミ、スサノオ）ができたというから、下立神岩が小さくなったのは三貴子ができたからで辻褄が合う。

■八十八霊場巡り

沼島は神社ばかりかと思っていたが、島の案内地図には八十八霊場巡りが描かれている。1番から88番までの霊場が島の内陸部分を一周するように点在している。

それができた理由は明治時代に戦争や伝染病で多くの人が亡くなり、その慰霊のために八十八霊場を設置したと書かれている。

【沼島の地図　八十八霊場巡りは黄色の点】

神宮寺という寺に一番霊場があるというから行って見ると、小さな石仏に「一番霊山寺」、その隣の石仏には「二番極楽寺」と彫られている。

どうやら 88 の寺や堂が存在するのではなく、四国八十八霊場の寺の名前を掘った石仏を 88 カ所に配置したものらしい。これは八十八霊場巡りというよりも八十八石仏巡りが正しい呼び方だろう。

【右が八十八霊場巡りの一番霊山寺の石仏、中央が二番極楽寺の石仏】

私は 5 年前に約 1450km の四国八十八霊場をジャンボタクシーで 10 日間かけて巡った。全部の寺を覚えていないが、最初と最後といくつかの寺の名前は覚えている。

同様に横さんも巡っており、彼は 17 日間かけて自転車で走破しているから日数も多く苦労しているぶん彼の方が詳しいかもしれない。

その後は港周辺の石仏を見つけては参拝する。石仏はさすがに民家の庭先にはないが、小さな堂の敷地の一角などにあって、なかなか見つけにくい。

そんなことで島内を石仏探しで歩いていると、島の子供や大人から「こんにちは」と声を掛けられる。これが爽やかで暖かみがあって、のんびりとした島時間を感じながら心地よい気持ちにしてくれる。

人家が多い地区を離れて島で一番高い標高 125m の地点を目指して山道を登って行く。最初は比較的簡単に石仏を見つけることができたが、山の奥に入るにつれてそうは問屋が卸さない。

この“問屋が卸さない”とはよく言ったもので、昨今の米不足も問屋が卸さないから大変なことになっている。おっと話がずれたか。

この辺りに〇〇番があるはずで、探すが、なかなか見つからない。行き過ぎたことに気が付いて戻って草木をかき分けて真剣に探すと見つかる。そんなことを繰り返していると、それが何だか楽しくなってくるから不思議だ。

これはもうオリエンテーリングといってもいいのかもしれない。

オリエンテーリングはスポーツ競技だが、こちらは気ままな中年おじさんの散歩、いや傍から見ていたら徘徊かもしれない。

【山の中の石仏】

山の中の道端には猪のワナがいくつも仕掛けてある。ワナの入口は 1m 四方くらいで、奥行は 3m くらいある頑丈な檻になっている。家島諸島にも猪のワナがあったが、沼島の方がたくさん仕掛けられている。

私がそれを見て「八十八という仏教の巡礼地で、殺生は許されないはず・・・」とつぶやくと、横さんが「殺さないからワナなのよ」と言っている。確かにそうだ。

【山の中の道端にある猪のワナ】

島一周のほぼ真ん中で、海を臨む景色が良い場所に 43 番、44 番がある。そして石仏の裏手に古い建物が建っており、地図によると接待所と書かれている。しかしもう何年も使われていないようだ。

四国八十八霊場巡りでは接待と呼ばれる巡礼者に対するお茶や食事の無料サービスがあるが、こんな小さな島でも接待をしていたことに私も横さんも驚いてしまう。

山を降りて港近くの「八十八番大窪寺」を拝んで、結願（けちがん）する。

近くに「沼島庭園」があり、庭園という言葉に魅かれて立ち寄るが、相当荒れ果てている。室町時代に京都から沼島に逃げてきた将軍足利義植が造ったというから昔は立派だったが、今は見る影もない。しかしそれがかえって都落ちした将軍にはふさわしいのかも知れない。それにしても将軍はここに立って何を思っていたのか。

【沼島庭園】

■民宿の料理

沼島には宿が 3 軒あり、私たちは民宿「あさやま」に泊まる。この宿を選んだ理由は漁師がやっている宿なので、朝獲れた新鮮な魚が食卓に並ぶからだ。

本日の食卓には地魚の刺身、ウマズラハギの煮魚、茹でたミズイカ、地魚の寿司が並んでいる。

最後に「鯛そうめんです」と言って女将が持ってきたのは大きな皿の中に温かい汁とそうめんが入っていて、その上に大きな鯛が尾頭付きで乗っている。ただ、そうめんは冷たいからそうめんで、温かいのは“にゅうめん”と呼ぶが、まあそれはどうでもいいか。

横さんは「鯛そうめんは初めてだ、それに鯛もでかい！」と言っている。女将は「鯛は今朝獲れたもので、大きさはいつもこんなものですよ」と言い、さらに「うちは鯛を焼かないで揚げているから、他とはちょっと違うのよ」とやや自慢している。

【夕食の刺身や煮魚】

【鯛そうめん】

鯛は身がしまっていて絶妙な塩加減で美味い。そうめんとの相性も良い。うどんに天ぷらが合うように、揚げた鯛だからそうめんに合うのだろうか。

そうめんといえば小豆島が有名だが、淡路島の南部でも「淡路島手延べそうめん」というのがある。歴史あるものだが流通量が少なく希少価値らしい。このそうめんがその希少なものなのかは分からないが、そうめん自体もなかなか美味い。

横さんは「この鯛そうめんには脱帽だね」と言いながら美味そうに食べている。

女将は「沼島は鱧が有名でね、5 月頃から夏の終わりまで鱧尽くしの食事になるから、その時にまた来てね」と言っていた。

第二章　淡路島

■BBQ に驚く

翌日には淡路島に戻る。せっかくなので淡路島でも泊まることにして、洲本市の安乎（あいが）浜という綺麗な海岸に面した「シーアイガ海月」に泊まる。

利用客は若い人たちが多い。それはリーズナブルな価格によるものかもしれないが、どうやら BBQ も理由らしい。案内のスタッフは「綺麗な海をすぐ目の前にしたロケーション抜群の BBQ は宿泊客だけでなく日帰り客にも人気があります」と自慢そうに言っている。

海岸のすぐ近くまでせり出したウッドデッキに屋根が付いたオープンエアーの BBQ 会場に通され、別のスタッフが真っ赤に燃えた炭火を持って来て、テーブル中央にセットしてくれる。

その炭火で焼く BBQ のメインの食材は海鮮か肉かを選ぶようになっており、私たちは 2 人でシャアして食べることにして両方を注文する。

【シーアイガ海月の BBQ 会場】

それ以外の食材はビュッフェスタイルの取り放題で、定番のソーセージ、トウモロコシ、野菜などが並んでいる。さらに BBQ では焼かないが、鶏の唐揚げ、玉子焼き、サラダ、スープ、みそ汁、白米、カレー、うどん、そしてデザートとして果物、ケーキ、ゼリー、アイスクリームもある。それらは全部で 30 種類くらいあるだろうか。

これならば若者にも家族連れにも人気がある理由が理解できる。

食べるだけでなく、海を見ながら波の音を聞きながらの BBQ は実に気持ちが良い。
ただ残念なことに BGM がない。「ハワイアンでも流れていれば南国の気分になるのに・・・」と横さんが言っている。

■意表を突かれた朝食
朝食は昨夜の食材の残りのソーセージやサラダなどを使ったビュッフェスタイルの簡単なものを想像していたが、スタッフから紙の箱を渡され、屋内のテーブル席に案内される。
私は「あれ、ビュッフェじゃないの？」と横さんに言うと、彼もまた「この箱、何なの？」と思ってもいなかったものに驚いている。

テーブルの真ん中には常設コンロがあってフライパンが乗っている。スタッフがコンロに火を付けて「どうぞご自身でお焼き下さい」と言って離れていった。
紙の箱の中にはコッペパン、バンズパン、食パンの 3 種類のパンがある。そして生玉子、ベーコン、ソーセージ、それ以外にトマトなどの野菜、ヨーグルト、果物も入っている。そして別の場所にコーヒーやスープもそろっている。
食材そのものはおそらく昨夜の残りだが、完全に意表を突かれたと言っていいだろう。

【シーアイガ海月の朝食】

私も横さんも今まで多くの宿に泊まって様々な朝食を食べてきたが、このような朝食は全く初体験になる。
考えようによっては人手不足から生まれた朝食なのかもしれない。おそらく昨夜のうちにBBQ担当のスタッフがビュッフェの残り物を箱に詰めて冷蔵庫に入れておいたのだろう。朝になって別のスタッフがそれを出してきてお客に渡して案内するだけだから、ワンオペで済む。そしてお客は焼きたてで温かい朝食を食べることができる。

労働人口の減少、人手不足という昨今の宿泊施設がかかえる問題をアイデアで乗り切っていると言っていいだろう。
私は電気メーカ在職時のエンジニア時代から好きな言葉があって、それは「アイデア無限大」というものだ。まさしくこの朝食がそれだろう。
そう思うと朝から何となく気分が良くなってくる。

私たちはフライパンでベーコンと玉子とソーセージを焼き、パンの上に乗せて野菜と一緒にハンバーガーにして食べる。
驚きと感動を口にしながら、結構な分量だったが全部食べ切った。

■バス旅はプロに聞け
前々日に、私は最終日つまり本日の帰りのバスをスマホで調べていた。横さんが午前中に大阪で用事があるというので、宿の前のバス停で朝8時前のバスに乗ることにしていた。

とは言っても私たちはNHKの朝の連ドラを見るという“お勤め”（？）もあり、もう少し遅いバスはないかと、昨日バスターミナルの切符売り場で聞いた。すると「洲本の市街地に戻るならば、その時間ですが、反対方面の津名港に行くバスならば8時25分がありますよ」とアドバイスを受けた。私たちは路線バスで洲本市のバスターミナルから来たので、そこに戻る事ばかり考えていたが、反対方向つまり北上する手があった。しかもその方が神戸や大阪に近づくので料金も安くなり時間も短い。
私も横さんも目が点になって、横さんは「さすがにプロだ」と言っていた。

津名港にやって来る。バスの出発まで30分ほど待つことになり、ここでまたプロに聞く。
すると「大阪までは行かないですが、舞子までなら数分後にバスがありますよ」と言っている。舞子は明石海峡大橋を渡ってすぐの場所で、私たちは直接大阪に行くことばかり考えていたが、橋さえ渡れば電車があるから時間も読めて早く行ける。

これらのことから当初の予定よりも朝は30分遅く出たのに大阪には30分早く着くことができた。やはり“バス旅はプロに聞け”ということか。

第三章　ヨットで沼島へ

■ヨットで沼島へ

横さんがヨット仲間に沼島の“鱧尽くし”の話をしたらしく、5 月の連休中に和歌山からヨットを出して沼島 1 泊のクルージングが決まったと連絡してきた。結果的には私と横さんの“下見”がこの計画のトリガになったので、私にも「一緒に行かないか？」とお誘いがあり、私は即座に「是非行きたい」と返事をして沼島クルージングに参加することになった。

私は海の無い群馬県出身なのでヨットには強い憧れがあった。それゆえ大学時代にディンギーヨットという 1～2 名乗りのヨットを買って、車の屋根に積んで日本各地を旅していた。

今回乗るヨットは 10 人乗りのレース用ヨットで、ディンギーヨットの何倍もある。そのヨットで和歌山から沼島に渡り、鱧を食べて 1 泊して、同じ航路を戻るという予定になっている。

■凄すぎる人生

出港は朝なので、私は横さんの家に前泊させてもらうことになった。連休中だから夜の港で花火が上がるというので、横さんが気を利かせて港近くの友人の家で花火を見ながら一緒に一杯飲むことになった。

友人の家はヨットハーバー近くにあり、２階のウッドデッキに通されると、5 月の海風が気持ち良く吹いている。そこで花火を見ながら会話が弾み、私はその友人の人生に感動してしまった。

彼もヨットマンで、何となく漫画のポパイに似ている。ただポパイは明日からの沼島クルージングには参加しない。

【ポパイの家のウッドデッキ　そこから見た花火】

ポパイ（勝手に言って失礼）はその昔、奥さんと小学生の娘さんと一匹の犬とヨットでアメリカに渡るため和歌山を出港した。それは約５年間という航海計画だった。

和歌山を出港し、北回り航路をとったのでアリューシャン列島沖で悪天候に阻まれ、落雷にあって危険を感じたのだろう。南周り航路に変更して青森の八戸まで戻った。

八戸で 40 日間滞在し、函館、秋田、粟島、佐渡、金沢、境港、福岡に立ち寄り、ハウステンボスは越冬のために 4 カ月間過ごした。それから鹿児島、甑島、屋久島、口之島、そして奄美大島

に入港した。奄美大島では１ヶ月間だが、娘さんを現地の小学校に通わせた。
　沖縄本島、宮古島、石垣島からフィリピンに渡り、マレーシアのコタキナバルには長く滞在した。娘さんには夫婦で勉強を教えていたが、コタキナバルで再び現地の学校に入れた。
　ここまでの経緯を書くとわずか数行だが、実は４年が経過している。

　ヨットで寝泊まりしているから滞在費はあまりかからない。それでも最低限の収入は必要になる。ポパイは優秀なヨットマンなので、他の船の修理など特殊技能を評価されて通常のバイト料の何倍も貰えたという。ただ就労ビザでないから個人的謝礼とでもなったのだろう。

　その後、コタキナバルからオーストラリアに渡った。オーストラリアには受験制度がないので娘さんは容易に高校に入学できた。そして大学に進学した。すると今までは保護者という名目でビザが発給されていたが、それがなくなり夫婦だけ帰国した。
　娘さんはオーストラリアの大学を卒業して現在は日本で医者をやっている。それは日本の大学医学部に入り直したという。娘さんは日本語、英語、そしてマレー語も話すというから凄い。

　花火も綺麗だったが、私にとってはポパイの大航海が実に強烈でとても印象に残った。
　特に感じたことは、どの港に入っても現地の人、そして知り合ったヨットマンたちに助けられたということだ。ヨットが繋ぐ人間関係に改めて感銘し、羨ましくも思った。

■快適クルージング
　翌日はいよいよ沼島に向けて出港する。メンバーは私と横さんを含め男女６人、もちろん私は何もできなから５人が手際よく艤装（船に装備をつけること）をしてくれる。
　最初は内燃機関（エンジン）を動力にして港を出る。そして帆（セール）も張ってクルージングが始まる。これを機帆走といい、エンジンで走る機走と風で走る帆走の２刀流の状態をいう。

【出港時の機帆走の状態　青い帽子が私】

天気は晴れ、北の風 3m くらい。あまり風を受けることもなく、しばらくの間は機帆走が続く。

陸地を離れるにつれて、風が少し吹き始めたのでエンジンを止めて帆走に移る。エンジン音と振動がなくなったことで、実に静かなクルージングになる。心地良い 5 月の風をセールに受けてヨットが走っていく。

【心地良い 5 月の風を受けたセール】

静かになったので横さんがメンバーを紹介してくれる。私の記憶のまま以下に書いておく。

舵を握る彼は、しゃべらなければ昔の時代劇の映画スターのような感じなので“眠狂四郎”と呼ぶことにしよう。その眠狂四郎を助けるセールをコントロールする優しそうな彼は、現在 NHK 朝の連ドラでその作者をテーマにしているアンパンマンに出てくる“カレーパンマン”に似ている。そしてセールを張るなどの長身を活かした仕事をしているちょっといかした彼は、科学忍者隊の“ガッチャマン”に似ている。紅一点で、気遣い抜群で段取り上手の女性は、その所作と美声がローカルテレビ局の女性アナウンサーのようなので“女子アナ”としておこう。横さんは今さら説明するまでもないが、私とは世界一周クルーズで知り合った旅友だ。

各々の名前から連想すると、老人ホームや幼稚園向けのハチャメチャな慰問団だが、実に気持ちのいいヨットマン・ヨットウーマンたちだ。

出港して間もなくビール飲む。これが実に美味い。船に酔わないことと酒に強いのは海の男の条件らしい。

今は北から風が吹いている。ヨットは風上に向かっては真っすぐ進むことができないが、沼島は和歌山の西に位置しているから北から横風を受けて帆走している。

ヨットは風が無くなり凪（なぎ）になると進まなくなるが、今は凪ではなくギリギリ進む程度の風が吹いており、静かなクルージングが続く。その速度は歩くよりも少し速い程度だろうか。和歌山から沼島までの直線距離は約 32km なのでこのままの速度で行くと 5～6 時間かかってしまうが、それもまた気ままな風任せの旅で楽しい。

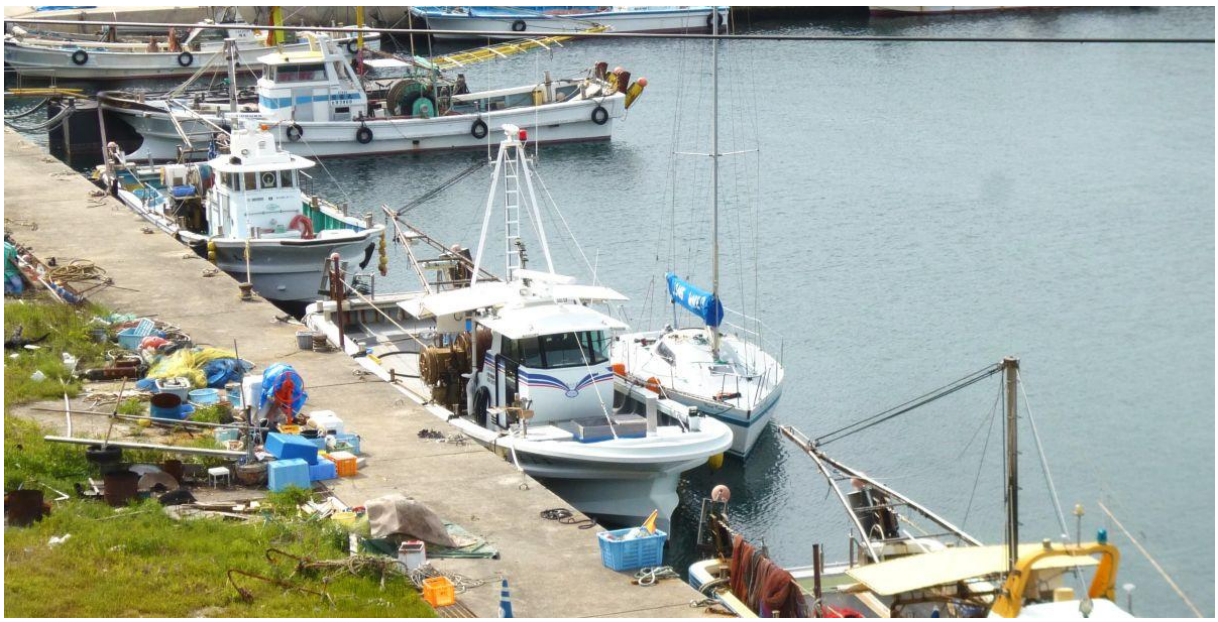
【ヨットから見た沼島】

沼島が近づいてくると、眠狂四郎が「エンジンかけるぞー」と言って機帆走になる。横さんが女子アナに「島の地図ある？」と聞くと、段取り上手の女子アナはさっと地図を取り出して横さんに渡す。受け取った横さんは「あの灯台の左から入って、真っすぐ進み・・・」と眠狂四郎に話している。

横さんが民宿「あさやま」に電話を掛けて、ヨットを付ける場所を聞いている。

漁港はむやみやたらに接岸できないから、民宿の持っている底引き網漁の漁船に横抱きさせてもらうことになっている。横抱きとは、係留してある船の横に繋いで係留することをいい、横さんは前回民宿に泊まった時にそのことを詳しく聞いていた。それができるから今回の沼島クルージングが実現した。

民宿のすぐ前が漁港で、部屋からヨットを見ることができる。



【漁船に横抱きしたヨット】

■鱧尽くしの夕食

今回のクルージングの目的の一つは“鱧尽くし”で、この民宿では 5 月から食べられる。鱧の漁場は沼島周辺の海底付近で、底引き網漁船を持ったこの民宿だからそれができるのだろう。

夕食の食卓には 3 人前の鱧鍋が 2 揃い、真ん中に置かれており、銘々の席の前には鱧の刺身と鱧の湯引きがある。

間もなくして民宿の大将がやってきて鱧鍋の作り方を細かく教えてくれる。対岸の和歌山から来た慰問団（失礼！）もこれだけの鱧尽くしは初めてらしく、その説明に聞き入っている。

【鱧尽くしの前で乾杯】

大将は熱くなった鍋に鱧の頭を入れる。頭のすぐ下の身（肉）が美味いと言っている。そして四角い白い固まりを入れる。これは骨付きの身で、身も骨も白いのでその境目が分からず一体に見える。骨付き肉は牛肉や鶏肉でも美味い部位だが、鱧も同じらしい。

鱧の浮き袋と肝は、しゃぶしゃぶで食べると良いと実演してくれる。眠狂四郎が時間を計っており、「15 秒だ」と解説している。

大将は「あとは野菜と鱧の身を入れて、そうめんもお好みでどうぞ」と言っている。野菜の中には鍋には珍しい玉ネギがある。玉ネギといえば淡路島が有名なので、この辺りの食文化なのだろう。そうめんは前回泊まった時にも出てきたが、鍋に入れるとはこれも面白い。

そして大将は「最後の雑炊に、この鱧の卵を入れるから食べないように」と言って厨房に戻る。鱧の卵は見た目やや黄色い白子のようで、説明されないと卵だと分からない。

【鱧鍋の具　鱧の頭、その下が身で、その左に骨付の身、下の左から卵、肝、浮袋】

さっそく鱧鍋を食べ始める。浮き袋と肝は 15 秒間のしゃぶしゃぶで食べる。この時間が絶妙で実に美味い。「これは食べたことないなぁ、でも美味い」と、眠狂四郎が言うと女子アナも横さんもうなずく。さらに白い四角い骨付きの身もなかなかいけると言っているが、ガッチャマンもカレーパンマンは食べるのに忙しいらしい。

その 2 人はもちろん、慰問団全員がよく食べ、そしてよく飲む。しかし鱧鍋だけでもかなりの分量あるのでなかなか手ごわそうだ。

また大将がきて、「これが鱧の寿司、そして鱧の天ぷら」と言って置いていく。果たして最後の鱧雑炊までたどり着くのだろうか。少し心配になる。

【鱧の刺身と湯引き】

【鱧の寿司】

食べるだけでなく眠狂四郎と女子アナの会話が面白い。まるで掛け合い漫才のようで、元々の陽気なキャラに加えて関西弁の持つ魔力とでもいうのだろうか、関東人にはこのような会話はできないだろう。そして時々、眠狂四郎がカレーパンマンをいじる。これに女子アナがツッコミを入れて、私も含めて皆が笑い出す。

笑いの合間に「肝は実に美味い！」とか、「天ぷらはフワフワ食感がいい」などという言葉が加わり、楽しく美味しい宴会が延々と続く。

最後に大将がやってきて「雑炊はどうしますか、少な目にしておきますか？」と言いながら鱧の卵を鍋の残り汁に入れて、白飯と鶏卵で鱧雑炊を仕上げてくれる。

出来上がった鱧雑炊はもちろん美味い。ただ全員が軽く一杯ずつ食べるのがもはや精いっぱいだった。

女子アナと眠狂四郎はもちろん、比較的静かなガッチャマンとカレーパンマンも、「またここに来て鱧食べたいね」と言っている。慰問団全員が余程“鱧尽くし”に感動したのだろう。

■風雨のクルージング

翌日は朝から雨で、雨の中の出港になる。

昨日の私は普通の服を着ていたが、今朝は横さんが用意してくれたレインウエアを着る。そしてレインウエアのズボンの上から履くようにと、厚い布製の半ズボンを渡された。彼は「これを着ていないと大変だよ」と言っている。

ヨットに乗り込みと全員が昨日同様に手際よく出港準備をしている。いやむしろ雨が降っているために昨日よりも素早いかもしれない。

港を出て、すぐに機帆走に移り、そして間もなく帆走になる。

雨は降っているが、風は昨日よりも強く吹いているから、ヨットはかなり横に傾いている。バランスをとるために横さんと女子アナとガッチャマンが浮き上がったデッキの端に乗り出している。私もその隊列に加わりバランス要員として少し貢献する。

この時に今朝渡された半ズボンの理由が分かる。これを履いていないとデッキの滑り止め塗装のためにレインウエアがボロボロになってしまう。

【風雨のクルージング】

眠狂四郎が操舵して、隣にはセールをコントロールするカレーパンマンがおり、そして 2 人の間には丸い小さなコンパスが置かれている。コンパスが置かれている理由は、雨と霧のために視界が悪く、周囲に島影など目安になるものが全く見えないからだ。

コンパス頼りの航行は何となく心もとない。とは言ってもこんなことはよくある事らしくメンバーたちは和気あいあいとしている。相変わらず冗談を言い合い、カレーパンマンがいじられ、ガッチャマンはビールを飲んでいる。

昨日に比べて風が強いのでヨットはかなり速く走っている。横さんに聞くと時速 15～16km くらいだと言うから自転車程度の速さだろう。この速度ならば 2 時間くらいで和歌山に着きそうだが、なかなか陸地が見えない。

スマホで現在地を確認すると距離は進んでいるが、少し南に来ている。

【コンパスを見ながらの操舵】

すると間もなく眠狂四郎が「タックいくぞ～！」と声を掛け、メンバーたちは一斉に動き始める。それを聞いて私は邪魔にならないようにキャビンに避難する。

どうして邪魔にならないように避難するのかというと、タック（Tacking）とは船首を風上に向けて旋回させ、風を受ける帆の面を反対に変えることをいう。その時に帆が反対方向に向きを変え、船の傾きも反対になる。ここで注意しないと帆を下から張るブームという棒に当たる事もあり、最悪は海に落ちることになる。

ヨットは風に向かって真っすぐには進めないが、45 度の角度までならば進むことができる。従ってタッグを繰り返すとジグザクにはなるが、結果的には風上方向に進める。

ちなみにタックの反対、つまり船首を風下に向けて旋回することをジャイビング（Jibing）といい、私の経験ではジャイビングの方が難しい。

かくして、何度かタックをして無事に帰港する。

往路は 4 時間 25 分、復路も 4 時間 20 分かかった。往路はスピードこそ出ていたが、南に少しずれて距離が長くなったからだろう。

ありがたいことに晴れのクルージングと風雨のクルージングの両方を経験することができた。ヨットは風任せなので、良い時もあれば悪い時もある。それはある意味、人生そのものかもしれない。

横さん、それから女子アナ、眠狂四郎、カレーパンマン、ガッチャマンに感謝感謝だ。ハチャメチャな老人ホーム・幼稚園慰問団などと失礼なことを言ったことをご容赦願いたい。

【ヨットハーバーに帰港して片づけた終わったヨット】

第四章　旅の記録

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。あれこれ話し合って委員会として評価値を算出する。ただし今回は私 1 人の意見で決定した。

評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の 7 項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションを評価するようにした。

評価基準は 5 段階としてその定義は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

「シーアイガ海月」は、泉質 3、風呂 3、料理 5、コスパ 5、サービス 4、建物・部屋 3、立地環境 5、総合点 4.00 になった。

湧出温度は 47℃、pH 8.6、泉質は低張性アルカリ性高温泉だった。

■最初の公共交通機関を使って行った沼島の旅の記録

実施は 2025 年 4 月 5 日（土）～4 月 8 日（火）の 3 泊 4 日で、その行程を示す。

・1 日目　10 時自宅を出て、新幹線で大阪へ行き、「クロスホテル大阪」開催の
91 回ピースボートの同窓会出席、保養所に宿泊

・2 日目　宿を 9 時に出て、JR 舞子駅で高速舞子へ、11 時 25 分舞子 BT から高速バス乗車、
洲本高速 BC でコミュニティバスに乗り換えて 13 時 34 分沼島帰船場前、
渡船に 10 分乗って 14 時沼島上陸、「弁財天神社」、「蓮光寺」参拝、
沼島八十八霊場巡り開始、途中「応神神社」、「観音寺」参拝、「沼島灯台」を観て、
港付近に戻り、「神宮寺」、「八幡神社」参拝、「大黒湯」の跡を見て、「梶原五輪塔」、
「八角井戸」見物、沼島八十八霊場巡り約半分終了して、「おのころ神社」参拝、
16 時 30 分民宿「あさやま」にチェックイン

・3 日目　宿を 9 時出発し、沼島八十八霊場巡り残り半分開始、「上立神岩」見物、
海水浴場に出て、恩地酒店でビールを飲んで、沼島八十八霊場 3 番所参拝で終了
「沼島庭園」見物、宿に戻り注文したおいたおにぎりを受け取り、
総合センター前の公園で昼食、13 時 20 分の渡船に乗り、淡路島に戻り、
コミュニティバスと路線バスを乗り継ぎ、安乎（あいが）バス停下車
16 時 40 分「シーアイガ海月」にチェックイン

・4 日目　8 時 20 分宿を出て、8 時 25 分路線バスで津名港へ行き、8 時 07 分に津名港から
高速バスで舞子 BT 経由して、JR で新大阪、新幹線で 15 時に帰宅

費用は約 6 万円、詳細を以下に記す。

交通費　25090 円

JR 新横浜から舞子往復　19260 円（往復割引、JR ジパング倶楽部で 3 割引）
高速バス　3520 円（舞子→洲本、津名港→舞子）
コミュニティバス　1000 円（往復）
沼島への渡船　920 円（往復）
路線バス　390 円

宿泊費　30900 円
大阪の保養所　6500 円（朝食付き）
沼島「あさやま」　13250 円（2 食、翌日のおにぎり、ビール）
淡路島「シーアイガ海月」　11150 円（2 食付き）

その他　3000 円
飲食費　約 3000 円（ビールやつまみなど 1 人当たり）

■ヨットで沼島に渡った旅の記録

実施は 2025 年 5 月 5 日（月）～5 月 8 日（火）の 3 泊 4 日で、その行程を示す。

・1 日目　9 時に自宅を出て、新幹線と在来線で和歌山へ、14 時に横さんと落ち合い
花山温泉で立ち寄り湯、横さんの友人宅で花火鑑賞と飲み会、横さん宅で宿泊

・2 日目　9 時にクルージングのメンバーと落ち合い、9 時 55 分に和歌浦港から出港、
沼島まで直線距離約 32km をクルージング、船上で昼食、14 時 20 分に沼島港入港
15 時に民宿「あさやま」チェックイン、島内散策、夕食は鱧尽くし

・3 日目　宿を 9 時 30 分に出て、9 時 40 分に沼島港出港、14 時に和歌浦港に入港、
15 時に和歌山ラーメン「丸三」で遅い昼食兼打ち上げ、
和歌山駅から大阪へ JR で移動し、大阪の保養所へチェックイン

・4 日目　宿を 8 時 30 分に出て、13 時帰宅

総費用は約 6 万円、詳細を以下に記す。

交通費　約 25000 円（新横浜-和歌山の往復、GW はジパング使用不可）
クルージング関連　20000 円（あさやまの鱧尽くし 1 泊 2 食付 15800 円、
他に飲み物代、つまみ、船上の昼食、燃料代など）
大阪の保養所　8500 円（2 食付き）
その他　約 6000 円（2 日目以外の昼食、タクシー代、飲み物など）